

日本語学習者は「語り手」をどう読み取るか
——ウクライナ人中級学習者の一人称の省略復元プロセス——How JFL learners comprehend the narrator's figure in a text:
Restoring first person subject omission by intermediate Ukrainian learnersポクロフスカ オーリガ
Olga, Pokrovska

要旨

日本語の文章では一人称主語が省略されることが多く、日本語学習者にとって文章理解を難しくする要因の一つとなっている。そこで本稿は、12名のウクライナ人中級日本語学習者の一人称主語の省略に関わる読みを、口頭翻訳を中心に分析した。その結果、一人称主語の省略に関しては、先行詞が直前の文脈にない箇所の復元が、日本語能力のより低い対象者、また何らかの要因により読みにハンデが生じた対象者にとって困難であることが明らかになり、一人称省略を復元する能力が日本語力の尺度になりうる可能性が示唆された。全体的に、対象者が主語のない文の動作主同定を行う際、課題文の趣旨に対するイメージなどの先行理解を主な手掛かりとする傾向にあった。特に誤った同定をしていた対象者は、文末形式などの言語形式に関する知識より先行理解を優先させていた。

キーワード：一人称動作主、読み誤り、誤解、省略復元、ウクライナ人日本語学習者

1. はじめに

本稿は、海外で日本語を学ぶ中級学習者の読み誤りの諸相を明らかにしようとする研究の一部である。日本語の読解を困難にし、読み誤りを誘発するものの一つに、主語をはじめとする動作主を指す項の省略がある。そうした項の省略が生じる原則の記述はある程度なされているが、読解において省略の復元に焦点を当てた指導でない限り、省略を意識せずに読むことに慣れている母語話者教師にとって盲点となる問題である。

中でも学習者が直面しがちなのは、日本語では最も省略されやすい要素（久野 1978）である一人称の項の省略である。本稿は、語り手としての一人称「わたし」に着目し、その省略復元に関わる要因について探る。

2. 先行研究

原則として省略が生じる場合、前文脈などからその指示対象（以下、先行詞）を復元できる。しかし、一人称主語の場合、一部のケースを除き、提示しなくてもよいとされている（恵谷 2002）。ゼロ代名詞の指示対象同定モデルを提案している桃内（2011）によれば、

日記や会話文などでは話者が省略要素の候補に挙がり、文章の始まりのような、文脈の手がかりのない場合、優先的に選好される。つまり、直前の文脈に手がかりがなく主語が省略されている場合、省略要素は「語り手」として解釈されやすい。

一方、主語が明示されないというだけで自動的に具体的な動作主の省略を想定すべきとは限らない、という難しさもある。市川 (1968) によると、主語の現れない文表現には「もともと主語の現れない表現形式であり、主語を補うということは原則として困難」であると考えられる「主語のない文」があり、これには、「小豆は水から煮ます」「カナダでは英語を使う」のような定義、事実など、一般者を主体とする一般化の表現が含まれる。こうした文は、その内容や特有の言語形式から主語を復元する必要がない旨を読み取る必要がある。

学習者のアウトプットにおける省略状況を調査した研究はあるものの(恵谷 2004 など)、省略復元を調べたものは少なく、18名の学習者に省略主語特定テストとフォローアップインタビューをしたフォード丹羽 (2013) が目に留まる程度である。そこでは、正解者の多くが「～がトピックだから」と文のテーマを重視したり、「何が難しいかの答えを求めて読んだ」と文意を求めたりするなど、文脈を手がかりに主語を決定しており、誤答者の中にも文脈に基づいて判断している者が少なくなかったという調査結果が報告されている。

3. 調査概要

3.1 調査対象者

本研究の対象者は、筆者の使用可能な言語や調査協力が期待できる環境であったことなどを考慮し、ウクライナの大学で日本語を主専攻とする12名(男女6名ずつ)の学習者にした。データ収集は2009年11月末から12月前半にかけて行った。対象者は、各大学の中級相当の3年生と4年生の中から、それぞれのクラスで、中の上から上の成績を持つ学習者3年生9名と4年生3名を担当教員に紹介してもらった¹。その12名を、以下「U01」のように、U01～U12という通し番号で示す。

対象者内部の相対的な日本語力を把握するために、短時間ででき測定力の高い²、筑波大学留学生センターで開発されたSPOTテスト、具体的には紙版のver. A(中上級用で65点満点)とver. B(初級用で60点満点)を使用した³(テストの詳細については小林・フォード丹羽・山元(1996)を参照)。テストは、3.2で後述する読解調査の前に実施し、対象者の都合によっては数名で一斉に受ける場合と、対象者が一人で受ける場合とがあった。二つのテストの結果は次ページの表1のとおりである。両テストの信頼性検討のためにクロンバックの α 係数を求めた結果、ver. Bは0.738で信頼性があり、ver. Aは0.947と高い

¹ ある程度の理解が成立していなければ読み誤りは捕捉しにくいと考え、研究全体の狙いから、成績下位学習者を対象者に含めない方が妥当であると判断した。

² たとえば小林他(1994)は、SPOTテスト得点と筑波大学留学生センターのプレースメントテスト成績の間に強い相関が認められた旨を報告している(文法0.82、総合点0.84)。

³ 調査に先立ち開発者に使用の承諾を得、音源とテスト問題を提供してもらった。

信頼性を示した。以下では、高い信頼性が認められた ver. A の点数を日本語能力の尺度として用い、特別言及がない限り「SPOT (成績)」などは ver. A の得点を指すこととする。対象者別の SPOT 成績は 5.1 の表 3 を参照されたい。

表 1 SPOT テスト成績

	ver. A ($\alpha=0.947$)	ver. B ($\alpha=0.738$)
平均	35.92 点 (55.26%)	52.25 点 (87.08%)
標準偏差	13.91	4.52
最小値	15 点 (23.08%)	41 点 (68.33%)
最大値	61 点 (93.85%)	58 点 (96.67%)

3.2 読解調査

読解調査は、対象者に課題文を読んでもらい、読みの過程と結果を記録したものである。課題文には本田直之の「面倒くさいから モノを捨てる」を用いた（巻末資料を参照）。745 字と長くなく、専門知識を要しないもので、日本語読解支援システムのリーディングチュー太では難易度が「普通」と判定されている。漢字にはルビをふり、語彙は対象者から意味確認があった場合、日本語能力試験旧 1・2 級に当たるもののみ、その訳を与えた。調査は、次に示す①から④の順に、対象者と一対一で行った。

① 調査内容の説明、承諾書の了承、②の練習

② 発話思考法を伴う課題文の読み上げと口頭翻訳（IC レコーダーで録音）

これは、読みの過程を調べる目的で行った。具体的には「課題文を読んでいき、ウクライナ語かロシア語に口頭で翻訳してください。訳の美しさは気にせず、思ったことをできる限り口に出し、また訳漏れのないようにしてください」と指示した。一度に読み翻訳する分量は対象者に任せたが、対象者は主に一文ごと、まれに一段落ごと音読し翻訳していた。対象者らにとって「少量ずつ音読して訳す」訳読法が理解確認手段としてなじみがあることから、それに思考過程の言語化を加えると説明すればわかりやすいと判断し採用した。翻訳を介しない「発話思考法による読み」より可視化できるものが多いと期待できる。本稿では主にこのデータを用い、「口頭翻訳」と示す。

③ 読んだ内容の筆記再生

これは、上記②の過程を経た結果としての文章全体の理解を調べる目的で行った。②が終了した後に課題文を一旦回収し、5~7 分の休憩を与えた。休憩終了後「先程読んだ文章の内容を、母語でできるだけ詳しく書いてください」と指示し再生してもらった。調査者の関心による読みの偏りを避けるために、②と③では動作主をはじめ、特定の項目に注意し明記するなどの指示は一切出さなかった。本稿では補助的に用い、「(筆記) 再生」と示す。

- ④ 口頭翻訳の音声に基づいたフォローアップインタビュー (IC レコーダーで録音)
これは、口頭翻訳過程の詳細を確認する目的で行った。課題文シートを返却し上記②の音声を聞かせながら、全体的に調査者が気になったことについて対象者に尋ねた。本稿では補助的に用い、「インタビュー」と示す。

上記①～④の言語は、対象者の希望に応じてロシア語、ウクライナ語、またはその組み合わせを用いた⁴。音声データはすべて文字化した。逆訳の影響を避けるために分析は原語のまま行ったが、本稿でデータを提示する場合は読者の便宜を考え、和訳を用いる。

4. 分析の前提

本章では、本稿が前提とする課題文の動作主およびそれに関連する対象者の母語の特徴について述べる。

特に日記や会話文などにおける主語省略復元の際に、文脈など文章の手掛かりがない場合、省略されているのは語り手であると優先的に判断され (桃内 2011 など)、教育現場でも「ヒントのない主語の省略は基本的に一人称」と教えられることもある。つまり、主語がなく直前の文脈にそれを指す手掛かりがない文が「一人称省略では」と想定される可能性がある。この観点に基づき課題文をセグメント化し、対象者に一人称動作主と解釈される 31 箇所を抽出し、分析の対象とした (表 2)。具体的には、下記の 4 種類である。

- ア類：語り手が実際に動作主である部分 (先行詞の明記箇所を含む)
- イ類：総称的省略が生じている部分
- ウ類：タイトルなどのように陳述性が低く動作主が問題にならない部分
- エ類：一人称以外の主語が省略されており、先行詞が直前の文脈にない部分

無情物が主語で動作主が非焦点化される部分は対象外とした (例：文 10「これは非常に面倒くさいことです」、文 19「...能力が求められるのです」)。動作主の各種類には、次ページ表 2「記号」欄のように記号を割り当て、動作主が問題にならないものは「-」、語り手は「▽」、総称は「□」、「人 (たち)」は「○」とした。複数の解釈を許すもの⁵について

⁴ 口頭翻訳はロシア語 11 名 (ある程度ウクライナ語や英語の単語を挿入する者もいた)、ウクライナ語 1 名、筆記再生はロシア語 9 名、ウクライナ語 3 名だった。

⁵ 文 11～13 では仮定とはいえ「整理整頓を放棄する」「探し物をする」「仕事ができない」「モノを増やす」という具体的な行動は語り手によるという解釈も捨てきれない。しかし、文 7 と 8 とは違って一般常識に近い誰にでも当てはまる法則的な内容が述べられていると言え、文章の趣旨からすれば一人称省略より総称的省略であると判断して差し支えないだろう。また、文 17 と 18 で述べられている内容は、語り手が自らの経験に基づいて編み出していることから、語り手の存在が背景にわずかに残っている。しかし、「現実の個別的事態...よりも、物事のあり方の道理に関心を向け」「時間を超えて成り立つ一般的な因果関係を表す」(益岡 1993) レバ形式が使われており、また語り手の体験記述よりも「読み手に目指してもらいたい状態」というアドバイス性を持っているため、これも総称的な省略であるとの解釈が妥当であると思われる。

は表 2 の「動作主」「記号」欄で副次的解釈を () で示す。なお、本稿の「セクタ②～⑦」「1-2」「ア～ウ類」との記述は表 2 の対応する項目を意味する。

表 2 課題文における一人称動作主・想定一人称動作主を含むセグメント

セクタ	番号	原文	動作主	記号	種類
① 問題 提起	1	φ モノを捨てる	n/a	—	ウ
	4-1	[だれもが (わたしが)] 断言してもいいのです (が)	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
	4-2	[人が (φ)] 使う (日)	人たち (n/a)	○ (—)	エ
	6-1	[人が (一般者が)] 理解していないから	人たち (総称)	○ (□)	エ
	6-2	[人が (一般者が)] とっておくのです	人たち (総称)	○ (□)	エ
② 語り手 登場	7-1	[わたしが (φ)] 持たない	語り手 (n/a)	▽ (—)	ア
	7-2	わたしは...続けています。	語り手	▽	ア
	8-1	[わたしが] ...捨てるし	語り手	▽	ア
	8-2	[わたしが] ...処分します。	語り手	▽	ア
③ 根拠 例示	11-1	[一般者が (わたしが)] ...放棄して	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
	11-2	[一般者が (わたしが)] 散らかしっぱなしにしておく	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
	11-3	[一般者が (わたしが)] 探し物をするときに	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
	11-4	[一般者が (わたしが)] 苦勞をします。	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
	12	[一般者が (わたしが)] 集中できず	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
	13	[一般者が (わたしが)] (モノを) 増やしても	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
④ 語り手 の行動 例示	14	[わたしが] 買います。	語り手	▽	ア
	15	[わたしが] 読んでいます。	語り手	▽	ア
	16-1	[わたしが] 読んだら	語り手	▽	ア
	16-2	[わたしが] 処分します。	語り手	▽	ア
⑤ 提案・ 根拠 例示	17-1	[一般者が (わたしが)] 抜き出して	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
	17-2	[一般者が (わたしが)] メモしておけば	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
	18-1	[一般者が (わたしが)] 移せば	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
	18-2	[一般者が (わたしが)] 捨ててかまいません	総称 (語り手)	□ (▽)	イ
⑥ 「転」	19-1	φ 物持ちがいい (こと)	n/a	—	ウ
	19-2	[一般者が (φ)] 峻別し	総称 (n/a)	□ (—)	イ
	19-3	[一般者が (φ)] 捨てていく (ような)	総称 (n/a)	□ (—)	イ
⑦ まとめ 提案	20	φ 買う (のは)	n/a	—	ウ
	21-1	φ 買うときには	n/a	—	ウ
	21-2	φ 買った分だけ	n/a	—	ウ
	21-3	φ 捨てる	n/a	—	ウ
	22	[一般者が] (これくらいの) 感覚でいる (のが)	総称	□	イ

※ 番号 1-2=文 1 の 2 か所目 [] =省略された部分 φ =動作主が問題とならない

これらの箇所を対象者が母語に置き換える際の留意点について説明しておく。まずはア類に当たる、語り手が具体的に心がけていることについて説明している部分 (表 2 セクタ②と④) だが、これらの文を対象者の母語に置き換える場合、形式上、一人称主語を省略

できる。ただし、この省略が成り立つのは、ウ露両言語において非過去形動詞述語が人称と数において主語と一致するからであり、文8の一部をウクライナ語にした下記例1のように、主語の有無にかかわらず述語の形にそれを反映させなければならない (vykydayu [捨てる] と pozbavlyayusya [処分する] の接尾辞 **yu** が一人称単数の文法的意味を担うため、「わたし」を意味する **ya** は省略が可能)。同じ理由から、対象者が誤って一人称省略と捉えた部分があった場合、母語のデータでそれが顕著に表れる。

原文：(文7から復元可→わたしは) 名刺も捨てるし、本や雑誌もどんどん処分します。

例1) Takozh/ (ya)/ vykydayu/ vizytivky,/ ta j/ knyzhok i zhurnaliv/ pozbuvayusya.
 また/ (私は) [省略可] /捨てる [一人称単数現在形] / 名刺を / それから /
 本と雑誌を / 処分する [一人称単数現在形]

次に、イ類に当たる総称的省略を対象者の母語に置き換える場合は、そもそも主語を持たない言語構造を使用する(下記例2を参照)。敢えて動作主を明記することが稀であり、その場合は斜格が用いられる。課題文の総称的省略構造の多くには「一人称省略」も副次的解釈として共存しているが、対象者の母語にこれらを置き換える際には同時に二つの解釈を表すことが不可能で、「総称的省略」か「一人称省略」かに絞る必要がある。文11の一部を露訳した例2では前者の訳例を、例3では後者の訳例を挙げておく。例3の訳例は「あくまでも語り手個人の話」である意味合いが強く、それに対して動作主が背景に溶け込む例2の方が文章の趣旨に近いと思われる。

原文：部屋を散らかったままにしておくと…探し物をするとき…苦勞をします。

例2) Yesli/ ostavit'/ komnatu/ v besporyadke... budet trudno/ chto-to/ najti.
 もし/ 放置する [不定形] / 部屋を / 散らかったまま…

難しいだろう [未来形] / 何かを / 見つけること [不定形]

例3) Yesli/ ya/ ostavlyu/ komnatu/ v besporyadke... zamuchajyus'/ iskat'/ nuzhnoye.
 もし/ (私が) [省略可] / 放置する [一人称単数未来形] / 部屋を / 散らかったまま…
苦勞するだろう [一人称単数未来形] / 探すこと [不定形] / 必要な物を。

残されるウ類とエ類だが、エ類「この/その人(たち)」の場合は主語の省略が許されず、また述語も複数形にしなければならない。それに対してウ類の、動作主が問題にならない部分については、人称や数を担わない不定詞や動作性名詞など、動作主が問題にならない形式が対応する。例4では文21の一部をロシア語にした訳例を挙げる。

原文：買うときには買った分だけ何かを捨てる。

例4) Pri/ pokupke/ vybrasyvat'/ stolko zhe, skolko/ kupleno.

と同時に / 買うこと [動作性名詞] / 捨てる [不定詞] / 同じだけ / 買われている [受け身]

このように、母語を通して課題文を読み進める際、対象者からア類に対しては一人称省略の復元、イ類～エ類に対しては省略復元の必要性の有無について判断することが求められていた。この二つに対象者がどのように対応したのか、次章で分析と考察を行う。

5. 分析と考察

5.1 一人称省略の復元に関わる読み

まずは、解釈が一義的であると言えるア類⁶について、対象者のデータにおいて各セグメントに対応する部分を切りだし、それぞれの動作主に応じて表 2 を参考に記号を当てた。ただし、「□」は「本は読んだら捨てなければならない」のような、主にモダリティを伴った総称的省略に用い、「われわれ (U08、U07、U04) / [不特定の] 人は (U01) …します」のような場合は「■」とした。これは、後者も一種の総称的表現であるが、敢えて動作主を明記することで前者「□」より具体化しているためである。また、たとえば文 8 に対して「本や雑誌は同じ [捨てられる] 運命にある」(U12) のように、無情物が主語になるなど動作主が非焦点化される場合は「—」とつけた。該当部分の再生・翻訳がなかった場合は空欄にした。その結果は下記表 3 のとおりである (上段：口頭翻訳、下段：筆記再生)。

表 3 再生文における「わたし」の反映状況 (SPOT 成績順：成績低位⇔成績高位)

翻訳	U06	U08	U09	U07	U05	U04	U12	U02	U03	U01	U11	U10
7-1	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	—	▽	—	—	▽
7-2	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽
8-1	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	□	▽	▽
8-2	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	—	▽	▽
14	□	■	▽	■	□	■	▽	▽	▽	—	▽	▽
15	—	■	▽	■	□	▽	▽	▽	▽	■	▽	▽
16-1	□		—	■	—	▽	▽	▽	▽	■	▽	—
16-2	□		▽	■	□	▽	▽	▽	▽	■	▽	▽
再生文	U06	U08	U09	U07	U05	U04	U12	U02	U03	U01	U11	U10
7-1			▽			▽	▽					
7-2						▽		▽			▽	▽
8-1						—		—				
8-2												
14		■					▽					
15		■	▽	—	□	▽	▽	▽	▽		▽	▽
16-1				■		—	—		—		▽	—
16-2		■	▽	■		▽	—	▽	▽		▽	▽
SPOT	15	16	25	27	30	35	37	45	46	47	47	61

※ ▽＝語り手 □＝総称 ■＝主語明記総称 —＝動作主不問 空欄＝データなし

⁶ ア類以外のセグメントは、複数の解釈を許す部分が多いことに加え、「総称的省略」が動作主を非焦点化する点で「動作主が問題にならない」部分と役割が似ており、イ類に対してウ類のような翻訳がなされた場合を誤解と言えるか否かの判断基準が定めにくい。

過程的な読み（口頭翻訳）においては、直前の文脈で先行詞「わたし」が明記してある文8の一人称省略復元はさほど問題にならなかったのに対し、異なる話題で先行詞と隔てられた文14以降の一人称省略は5名と約半数の対象者（網掛けで表示）が見抜けなかった。たとえば、「必要なものは惜しみなく買うべきです」（U05）とアドバイスとして解釈したり、「われわれが月に40冊の本を読むとしたら、読んだら捨てるものです」（U07）とものごとのあり方として捉えたりした。その結果、同じ5名の筆記再生では語り手についてまったく記述がなく、最終的理解において書き手が自らの生き方に基づき編み出した法則から、その書き手が消えている。これは、少なくともこの課題文の大意からすると必ずしも問題ではないが、だからこそ母語話者教師にとっては見逃しやすい可能性がある。

インタビュー時に文14以降の主語決定の理由を尋ねると、文14の時点で対象者が形成した課題文のイメージや流れの解釈など、対象者なりに解釈された文脈の効果が大きかったようである。たとえば、対象者U08は文14～16について、「一人称かとは思ったが、筆者は既に自分の話からわれわれ人間がどう振舞うか、という話に移ったように思った」と述べていた。またU06は「述語の形式『買います』から一人称だとわかっていたが、新出単語に惑わされ、思わず『買わなきゃいけない』と読んでしまった」と述べており、その理由として「文章全体がアドバイスの雰囲気があるので」と、明示的知識があっても、漠然とした文章全体の印象に流される様子がうかがえた。

更に、対象者をSPOT成績順に配置したところ、U01を除くこれらの対象者は日本語能力のより低い左側に偏っている傾向にあった。U01はSPOT成績では高位であるにもかかわらず、表3からもわかるように、「わたし」が明記してある文7以外語り手が登場せず、他のどの対象者とも異なる特殊な読み方をしていた。これはキーワードの誤読という外的要因による。U01は文章のタイトルにある「モノ」を「メモ」と捉えてしまい、文9までその誤読に気付かなかった。特に「わたし」が初登場する文7、またその前の文6で「メモをとっておく」「メモを持たない」を慣用句と考えその解読に困惑したため文7の先行詞を軽視したと考えられる。（文6の「(物持ちのよい人たちが)理解していないから」で「私が理解していないから…」と翻訳しかけ、対象者の中で唯一一人称を持ち込み、また文7では「なるべくメモを持たない生活」とはどのようなもので考え込んでいた）。U01は日本語力がより高いからこそその「わかるはずなのに辻褄が合わないことへの焦り」が見られた（インタビュー時は「とても恥ずかしい」「[口頭翻訳の音声を]もう聞いてもらえない」と言い、自分のこの失敗を過剰に気にかけていた）。文14では既に誤読に気づいていたが、自分の読みに自信をなくしており、「惜しみなく」の意味に引っかかって「価値のある（＝惜しい）必要なモノだけ買うこと？」と読み、動作主の同定を放棄していた。その意味で総合日本語能力が決して低くなかったU01は、特別な状況による影響から一時的に日本語能力に支障が生じたと言えよう。

その一方で、SPOT 成績が高くなかった U09 はア類の一人称省略をすべて復元できていた。インタビューでその理由を尋ねると、『彼』などがなかったので第三者の話ではないだろうと思った。それに、日本語には『ぼく』『わたし』は省いて良いと習ったので、自動的に一人称かなと思った」と述べていた。また、U09 は U01 と同じく「モノ」を「メモ」と読み間違え、文 17 までその誤読に気づかなかったが、一人称省略復元においてこれはかえって好影響だった。「前半の部分まではよく理解できず、『ここでもし』(文 11) になって初めて『メモ』に結び付けなくてもよくなったから、いきなり話が見えた」と述べており、文 14 を読む時点でその解釈に影響できるような、課題文全体の解釈がはっきりしていなかったと考えられる。先行文脈の手がかりがない状況下では、文構造に関する知識に注意を向けるしかなかった可能性がある。

そこで、問題となるセクタ④の最初の文 14 と、筆記再生で出現率が多かった文 15 の 2 文について、口頭翻訳のデータにおける一人称動作主の出現・非出現状況（それぞれ 1 と 0 に変換した）と SPOT 成績との相関を求めた（正規分布していないデータのため、スピアマン相関係数を使用）。その際、対象者全員のデータと、また特殊な読み方をしている U01 のデータを除いたデータを用いたところ、U01 を除いたデータでは 5%水準で有意な強めの正の相関が認められ、また対象者全員のデータの場合は文 14 のみ 10%水準で中程度の相関があると言える（表 4）。特殊なケースを除けば、日本語能力が高いほど読みにも余裕が生じ、先行詞が直前の文脈にない一人称の省略を見抜く能力も高まる可能性が考えられる。また裏を返せば、そのような省略を読み取る能力を総合日本語能力の一つの尺度として見なせる可能性も考えられる。今

後の課題として、読みの条件をより絞って標本数を増やし、説明モデル構築をも考慮に入れた量的分析によりその可能性を追求したい。

表 4 翻訳における一人称出現率と SPOT の相関関係
 (スピアマン係数)

	全員 (n=12)	U01 抜き (n=11)
文 14	0.5078334, ($\rho=0.09188$)	0.6928203* ($\rho=0.01811$)
文 15	0.4905115 ($\rho=0.1054$)	0.7171372* ($\rho=0.01299$)

. $p < 0.1$ * $p < 0.05$

5.2 一人称の想定省略に関わる読み

ここでは、一人称省略ではない、またはそう解釈されにくい主語なし文における、誤った一人称省略復元についてまとめる。本項では表 2 とは異なり細かく分節化せず、文単位で対象者の一人称出現状況を追う。なお、文 1 と文 14 以降の部分についてのみ次ページの図 1 にて可視化する。①～⑫の数字は U01～U12 の対象者を、また太字は SPOT 成績上位群の対象者を指している(45点、約 70%以上。それ以外の対象者は 37 点以下である)。網掛け部分は「われわれ」のような、4.2 の表 3 で■にあたる「特殊総称」を指す。番号の配置順は図の見やすさを優先しており、特に法則性はない。

まず、先行詞がなく文脈の手がかりもない 1-2 と 4-1 においては、後者は一人称として解釈する者はおらず、ほとんど総称として捉えていた。一部の対象者は、動作主より行為が問題になる「許可を尋ねる／与える」場面で学習される「～でもいい」がヒントとなり、また一部は「～でもいい」を分割して「断言するのはいいことだ」と、意味上不正確だが構造上同じく総称となる読み方をしていた。それに対してタイトルでは、一人称省略と捉えた対象者と総称や動作主が問題にならない翻訳をする対象者は5名ずつだった(図1を参照)。文14以降では文脈に影響されて一人称省略を見抜けなかった対象者のほとんどが、原文そのもの以外判断材料のない1-2では一人称としているところが興味深い。「一人称は基本的に省略される」との知識はあるものの、文脈などに影響されやすいようである。

次に、一人称との副次的解釈が可能なセクタ③で一人称を登場させたのはU11 (SPOT成績上位)のみだった。これは、語り手の具体的な心がけを述べた部分の後に「モノが多い分だけその管理も厄介である」という分かりやすい法則が挿入されている文脈の効果が大きいと思われる。U11も文11では「私もし掃除を怠れば」「後々私が苦勞する」と語り手を意識しているが、文12では「私が[集中]できなくなる」と言いかけた後「[一般者が]集中しづらくなる」と言い改めた。また、筆記再生ではこの部分に対応する記述がすべて総称になっていた。このことから、読み進める中でこれが語り手についてのたとえ話であるより語り手の意見であることに気づいたと考えられる。その証拠として、文14に取り掛かった際には「これは自分の話をしているだろう」とコメントしている。

図1 口頭翻訳における一人称主語(先行詞から隔てられた部分)

文	一人称	総称(省略含む)・不問	翻訳なし
(1)	⑨ ④ ⑥ ⑦ ①	⑤ ② ⑩ ⑪ ⑫	③ ⑧
...			
(14)	⑫ ③ ⑨ ⑩ ② ⑪	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧	①
(15)	⑫ ③ ⑨ ⑩ ② ⑪ ④	⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ①	
(16)	⑫ ③ ⑨ ⑩ ② ⑪ ④	⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ①	⑧
(17)	⑫ ③ ⑨ ⑩ ② ⑪	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ①	
(18)	⑫ ③ ⑨ ⑩	② ⑪ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ①	
...			
(20-22)	⑫	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪	

※ ①～⑫=対象者U01～U12 太字=SPOT 45点(約70%)以上 網掛け=特殊総称
斜体=条件節を読み取った対象者

それに対して、セクタ⑤では前のセクタからそのまま文18まで一人称を継続した対象者は4名、文17まで継続した対象者は6名だった。セクタ④で動作主を非焦点化していた対象者のうち、セクタ⑤から語り手を登場させる者はおらず、少なくとも文17ではすべての対象者が前のセクタに合わせる傾向にあった。例えば、U03の口頭翻訳は「特にビジネス関連の出版物などの本は <「抜き出す」の意味確認> 私は必要な部分だけを抜き

出して、メモをして、そして <「生かす」の意味確認> その情報を活用します」と一人称に統一されていた。インタビュー時には文 17 の自分の読みが気になり、「『おけば』の部分で反映させていない」と述べ、理由を尋ねると「『そこでわたしは』とあるから、課題文は全て語り手自らの話なのかと思った」と述べていた。

これは、文 17 の内容構造に関係があると考えられる。文頭に「特にビジネス書などは」と、前文の内容を絞ることを示唆する表現があり、そのつもりで読み進めてしまうと、「おけば」の条件表現を読み取り損なってしまう、「必要な部分だけを抜き出してメモしておくことが、語り手が実際にしていることというより、読み手への勧めであることはわからない。また、主節で「情報」という新たな主語が登場する上に、U03 と同じように多くの対象者にとっては「活用する」という意味の「生かす」は馴染みがなかった。その結果主節の理解が曖昧で、先行内容から続く一人称構造を崩すための手がかりを得られにくかったようである。それに対して文 18 は、「データを移せば捨ててよい」という流れがよりわかりやすかったと考えられる。

また、セクタ⑤で一人称主語から総称などに移る対象者は、条件表現を読み取っており（文 17 と 18 では U04、文 18 では U02 と U11 ; 図 1 斜体）、文 18 の文末については人稱を問わない「捨てて構いません」と読み取っていた。それに対して文 18 で一人称に留まった U03 は条件表現を反映させていたが、文末は「[私は] 捨てている」とし、また U10 は「[私は] データを移す、そして名刺自体はもう捨ててもよい」と、文末は保つも条件表現を読み取っていなかった。U03 と U10、U02 と U11 は 4 名とも SPOT 成績上位者である。後者 2 名が条件表現に気づいたため総称に移ったのか、文末の「捨てて構いません」が意味上レバ形式と合致しやすかったからなのか判断できないが、述語の形式に気を配りつつ先行理解を修正する、トップダウン・ボトムアップ的読みのバランスが問われるようである。

最後に、1 名の対象者 U12 はセクタ⑦にまで語り手を登場させ、また、口頭翻訳では「モノは捨た方がよい」と総称的省略として捉えていた文章のタイトルを、筆記再生では「保管は面倒だと考える私はモノを捨てている」と改めていた。インタビューでは、「ここ（文 7）で『わたし』から始まって、ここ（まとめ）に至る感じです」と述べている。この対象者もまた「モノ」を「メモ」と読み間違え、文 20 に至るまでそれに気付かなかったため理解に苦労していたが、文 7 あたりからようやく確信が持てる理解に至って課題文の趣旨について判断し、その判断に沿って最後まで読み進めたようである。

このように、主語のない文の動作主を同定するときに対象者は文章に対するイメージを重要な手掛かりとして使っており、その効果の範囲は文章全体に及ぶこともある。また、日本語能力のより高い対象者でも、述語の捉え方を自分の理解に合わせる場合がある。

6. まとめと今後の課題

本稿では、12名のウクライナ人中級日本語学習者を対象に、一人称動作主に関わる読み方を分析し、その過程を記述した。主語のない文の動作主を同定する場合、学習者は文脈、特に自分が文章に対して持っているイメージを重要な手掛かりとして使うことが分かった。これは、フォード丹羽(2013)のデータと似た傾向である。特に先行詞が直前の文脈にない一人称の省略は日本語能力のより低い対象者、また特定の文章において理解のハンデが生じた対象者にとって読み取ることが難しいことが分かった。また、「一人称は基本的に省略される」などの明示的知識があっても先行理解の影響の方が大きかった。これは日本語能力の上位群にもある程度見られるが、中位・下位群の対象者にとってより顕著であった。

対象者の母語や課題文の制約、またサンプル数などから一般化は難しい結果であるが、今回明らかになった相関関係の裏にある因果関係を説明するモデル構築を視野に入れつつ、異なるタイプの文章や他言語母語話者を対象にして分析を行い、日本語教育への示唆を与えていきたい。

参考文献

- 市川孝(1968)「試論 主語のない文」『月刊文法』1-1、pp.130-135
- 恵谷容子(2002)「説明文と随筆の文章における主語の省略」『早稲田大学日本語教育研究』1号、pp.101-115
- 恵谷容子(2004)「主題の省略に関する一考察 —『連続型省略』における容認度の観点から—」『日本語教育』123、pp.46-55
- 久野暉(1978)『談話の文法』大修館書店、332
- 小林典子、丹羽順子、山元啓史(1994)「日本語能力簡易試験としての『聞きテスト』—解答形式の漢字要因に関する分析—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9号、pp.149-158
- 小林典子、フォード丹羽順子、山元啓史(1996)「日本語能力の新しい測定法 SPOT」『世界の日本語教育』6号、pp.201-218
- フォード丹羽順子(2013)「日本語学習者の読解における主語の把握に関する一考察 —「は」の理解と助動情報の読み—」『佐賀大学全学教育機構紀要』創刊号、pp.29-42
- 益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」『日本語の条件表現』くろしお出版、pp.1-20
- 桃内佳雄(2011)「日本語文章におけるゼロ代名詞解析に関する基礎的考察」『北海道学園大学工学部研究報告』第38号、pp.100-119

資料

(1) 「面倒くさいから モノを捨てる」

(2) ときどき「いつか使う日がくるから」と、空き箱や古くなった品物をとっておく人がいます。

(3) よくいえば物持ちがいい、という人たちです。

(4) ただ、これは断言してもいいのですが、その「いつか使う日」がやってくることは永遠にありません。

(5) あったとしても、そんな確率は数千分の一でしょう。(6) この点を十分に理解していないから、なんとなくモノをとっておくのです。

(7) そこでわたしは、なるべくモノを持たない生活を続けています。(8) これは品物だけでなく、名刺も捨てるし、本や雑誌もどんどん処分します。

(9) なぜなら、モノが増えていくほど、整理整頓にかかる時間と労力は増大していくからです。

(10) これは非常に面倒くさいことです。

(11) ここでもし、面倒くさいからと整理整頓を放棄して部屋を散らかしっぱなしにしておくと、スペースをとられるし、今度は探し物をするときに大変な苦勞をします。(12) それに散らかった部屋では仕事に集中できず、ストレスもたまっていく。(13) モノを増やしても、いいことなどひとつもないのです。

(14) もちろん、必要なものは惜しみなく買います。

(15) たとえば本や雑誌だと、月に 40 冊以上は読んでいます。(16) しかし、よほど大切な本でない限り、読んだら処分します。(17) 特にビジネス書などは、役立つ部分だけを抜き出してメモしておけば、それで「情報」は生かされるのです。

(18) 名刺にしても、パソコンや携帯電話のアドレス帳にデータを移せば、もう捨ててかまいません。

(19) ひと昔前なら「物持ちがいい」ことにも価値があったのですが、これだけモノと情報が溢れた時代には、自分にとってほんとうに必要なモノと情報を峻別し、それ以外は捨てていくような一種の編集能力が求められるのです。

(20) モノを買うのは最小限。(21) そして買うときには、買った分だけなにかを捨てる。(22) それくらいの感覚でいるのがちょうどいいでしょう。

(本田直之 (2009) 『面倒くさがりやのあなたがうまくいく 55 の法則』大和書店、pp.92-93)

(ぼくろふすか おおりが 言語社会研究科博士後期課程)